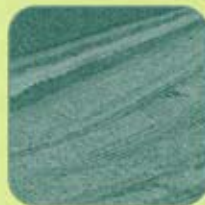


# Silent Spring

## 『沈黙の春』

便利さを追い求めてきた現代文明。しかし、このままでいいのだろうか。  
～環境保護のパイオニア、レイチェル・カーソンへ手紙を書こう～

地球環境を考えて、私たちのライフスタイルを  
ふりかえる必要性が指摘されるようになった。  
40年以上も前に、  
エコロジーについて声をあげた人がいる。  
それが科学者レイチェル・カーソン。  
カーソンの言葉を読み、  
彼女が鳴らした警鐘について考えてみよう。  
多くの人びとに、  
エコロジーという視点を広めることに成功した、  
彼女の主張に耳を傾けてみよう。



### 1 手紙形式のエッセイ募集

レイチェル・カーソンの『沈黙の春』第1章を読んで、あなたが考えたこと、思ったこと、感じたことを、レイチェル・カーソンへのあなたからの手紙という形式で、自由に書いてみてください。

### 2 応募資格

高校生(学年や性別を問いません)

### 3 応募要領

日本語の場合は、400字詰原稿用紙3枚(縦書き1200字)程度。英語の場合は、400words程度(A4判用紙)。(鉛筆の場合は、HB又はBを使用)  
※別紙に、氏名(フリガナ)・性別・高校名(所在県名)・学年・自宅住所(郵便番号も記入)・電話番号を記入して原稿に添付し、郵送してください。

### 4 募集期間

2003年7月1日(火)～9月5日(金)(当日消印有効)

### 5 賞金等

最優秀賞1名(賞金5万円を贈呈、10月5日(日)津田塾大学において表彰します)。優秀賞若干名(賞金1万円を贈呈)。最優秀作品は津田塾大学広報紙「Tsuda Today」と津田塾大学ホームページに、優秀作品は津田塾大学ホームページに掲載・公表します。応募作品は返却しません。応募作品の著作権は主催者に帰属します。

### 6 入選発表

9月30日(火)までに、入選者本人に通知します。

### 7 提出先・問い合わせ先

〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1 津田塾大学「高校生エッセイ・コンテスト係」TEL.042-342-5113 E-MAIL:essaycon@tsuda.ac.jp

<http://www.tsuda.ac.jp/>  
津田塾大学ホームページで、第1回～3回の高校生エッセイ・コンテスト選考結果等を掲載しています。どうぞご覧ください。

# Silent Spring

レイチェル・カーソンの『沈黙の春』第1章を

感じたことを、レイチェル・カーソンへのあなたか

# Ra

## Chapter 1

### "A Fable for Tomorrow"

アメリカの奥深くわけ入ったところに、ある町があった。生命あるものはみな、自然と一つだった。町のまわりには、豊かな田畑が碁盤の目のようにひろがり、穀物畑の続くその先は丘がもりあがり、斜面には果樹がしげっていた。春がくると、緑の野原のかなたに、白い花のかすみがたなびき、秋になれば、カシヤカエデやカバが燃えるような紅葉のあやを織りなし、松の緑に映えて目に痛い。丘の森からキツネの吠え声がきこえ、シカが野原のもやのなかを見えつかくれつ音もなく駆けぬけた。

道を歩けば、アメリカジャクナゲ、ガマズミ、ハンノキ、オオシダがどこまでも続き、野花が咲きみだれ、四季折々、道行く人の目をたのしませる。冬の景色も、すばらしかった。野生の漿果しょうかや、枯れ草が、雪のなかから頭を出している。野生の実やベリー（漿果）を求めて、たくさんの鳥が、やってきた。いろんな鳥が、数えきれないほどくるので有名だった。春と秋、渡り鳥が洪水のように、あとからあとへと押し寄せては飛び去るところになると、遠路もいとわず鳥見に大勢の人たちがやってくる。釣りにくる人もいた。山から流れる川は冷たく澄んで、ところどころに淵をつくり、マスが卵を産んだ。むかしむかし、はじめて人間がここに分け入って家を建て、井戸を掘り、

家畜小屋を建てた、そのときから、自然はこうした姿を見せてきたのだ。

Then a strange blight crept over the area and everything began to change. Some evil spell had settled on the community: mysterious maladies swept the flocks of chickens; the cattle and sheep sickened and died. Everywhere was a shadow of death. The farmers spoke of much illness among their families. In the town the doctors had become more and more puzzled by new kinds of sickness appearing among their patients. There had been several sudden and unexplained deaths, not only among adults but even among children, who would be stricken suddenly while at play and die within a few hours.

There was a strange stillness. The birds, for example — where had they gone? Many people spoke of them, puzzled and disturbed. The feeding stations in the backyards were deserted. The few birds seen anywhere were moribund; they

読んで、あなたが考えたこと、思ったこと、

らの手紙という形式で、自由に書いてみてください。

# Rachel L. Carson

trembled violently and could not fly. It was a spring without voices. On the mornings that had once throbbed with the dawn chorus of robins, catbirds, doves, jays, wrens, and scores of other bird voices there was now no sound; only silence lay over the fields and woods and marsh.

On the farms the hens brooded, but no chicks hatched. The farmers complained that they were unable to raise any pigs — the litters were small and the young survived only a few days. The apple trees were coming into bloom but no bees droned among the blossoms, so there was no pollination and there would be no fruit.

The roadsides, once so attractive, were now lined with browned and withered vegetation as though swept by fire. These, too, were silent, deserted by all living things. Even the streams were now lifeless. Anglers no longer visited them, for all the fish had died.

In the gutters under the eaves and between the shingles of the roofs, a white

granular powder still showed a few patches; some weeks before it had fallen like snow upon the roofs and the lawns, the fields and streams.

No witchcraft, no enemy action had silenced the rebirth of new life in this stricken world. The people had done it themselves.


本当にこのとおりの町があるわけではない。だが、多かれ少なかれこれに似たことは、合衆国でも、ほかの国でも起っている。ただ、私がいま書いたような禍いすべてのそろった町が、現実にはないだけのことだ。裏がえせば、このような不幸を少しも知らない町や村は、現実にはほとんどないといえる。おそろしい妖怪が、頭上を通りすぎていったのに、気づいた人は、ほとんどだれもいない。そんなのは空想の物語さ、とみんな言うかもしれない。だが、これらの禍いがいつ現実となって、私たちにこそいかかるか——思い知らされる日がくるだろう。

from *Silent Spring* by Rachel Carson  
Copyright © 1962

Reprinted by Permission of Frances Collin, Trustee u/w/o Rachel Carson, Wayne, Pennsylvania through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

レイチェル・カーソン著 青樹葉一訳  
『沈黙の春』新潮社 2001年

## レイチェル・カーソンが鳴らした警鐘



「春が来ても自然は黙りこくっている」と、1962年に出版されたその著『沈黙の春』のなかで、20世紀のアメリカに警鐘を鳴らしたのは、海洋生物学者レイチェル・カーソンでした。

カーソンは1907年にペンシルベニア州の田舎町で牧師の娘として生まれ、自然に恵まれた環境のなかでのびのびと育つ一方、懸賞創作で受賞した文学少女でもありました。作家を志していた彼女はペンシルベニア女子大学に入学し英文学を専攻しましたが、2年次に受講した生物学に魅了され、専攻を生物学に変更しました。ジョーンズ・ホプキンス大学で動物学の修士号を取得した後、内務省漁業野生生物局に勤務し、同時に執筆活動を始めます。

『潮風の下に』(1941)、『われらをめぐる海』(1951)、『海辺』(1955)といった海および海洋生物に関する一連のベストセラーは、抒情的な美しさに満ちた文学性の高いものです。

当時大量に使用されていたDDTなどの農薬が、自然環境を破壊している実状を世に知らしめた『沈黙の春』が出版されるやいなや、論議が湧きあがり、産業界からは激しい攻撃を受けました。しかし、環境汚染問題に火がつき、ありとあらゆるマスメディアがそれを取り上げるようになりました。ついに時の大統領ケネディも化学物質がもたらす環境汚染問題の調査に乗り出すこととなります。こうして『沈黙の春』は1970年の環境保護局設立のきっかけともなり、アメリカの環境政策に重要な影響を与えました。

カーソンは1964年にその生涯を閉じました。姪の幼い息子と自然のなかで過ごした経験をもとに書かれた『センス・オブ・ワンダー』(1965)が死後出版されています。

### 参考書籍

- レイチェル・カーソン著 青樹築一訳『沈黙の春』(新潮社、2001年)
- レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 かもがわブックレット  
『レイチェル・カーソンーその生涯』(かもがわ出版、1993年)
- レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳『海辺』(平凡社、2000年)